

研究課題名	【Web 会議番号 2020_06】 心因性食物アレルギー形成の解明と寛解プログラムの作成 -食物アレルギーの真の寛解へ
フリガナ	コニシ ミズホ
代表者名	小西 瑞穂
所属機関（機関名） （役職名）	国立成育医療研究センター 研究員
本助成金による発表論文、学会発表	発表論文 Mizuho Konishi, Junko Kamoshida, Hisako Ogasawara, Mieko Takahashi, Yukihiro Ohya. 2019 Tentative development of a psychoeducational program for alleviating psychological burden of mothers of young children with milk allergy. <i>Journal of Health Psychology Research</i> . 31(2),183-193. 学会発表 Konishi, M., Kamoshida, J., Takahashi, M., Ohya, Y. 2021 A Psychoeducational Program for Relieving Psychological Burden of Mothers of Toddlers with Milk Allergy. 32st International Congress of Psychology. Prague, Czech Republic. 7.20(7.18-23).

研究結果要約

食物アレルギーの患者は長期間に渡って、原因物質をほとんど摂取しない生活を送る。特に幼児期から学童期にかけて徐々に耐性獲得をしていく子どもが、これまで除去をしていた原因物質の味や食感などに慣れなかったり、アレルギー症状の発症への不安から原因食物自体への拒否感が強まって摂取できなくなることが臨床場面で散見される。

本研究では食物アレルギーの治療経過中に生じる心理的要因により、寛解後も原因食物を摂取できない食物アレルギーを心因性食物アレルギーとし、その形成過程を明らかにし、その治療プログラムの作成を目的とした。そこで、食物アレルギー患者の保護者 287 名を対象に、各原因食物別の心理面に与える影響について質問調査を行った。その結果、卵と牛乳が原因食物の場合、アレルギー症状を起こした経験回数が多く、原因食物を摂取することへの恐怖感も大きかった。牛乳に関しては、子どもが食物アレルギーであると保護者が気づく前に牛乳を嫌がる子どもが一定数いることも明らかとなり、心因性食物アレルギーが形成されやすい可能性が示唆された。一方、原因食物が小麦の場合は子どもたちの小麦への拒否感が低いことが見い出された。さらに、就学前後の 4 歳～7 歳頃に食物アレルギーに対するネガティブな気持ちが子どもたちに生じ始めることが明らかになった。以上より、4～7 歳の卵と牛乳アレルギーを持つ子どもを対象とし、心因性食物アレルギーの形成の予防を目的に全 8 回のプログラムと各回に対応したワークブックの作成を行った。